



人間論



第6章 人間の墮落、罪、刑罰

6.1. 私たちの始祖は、サタンの悪巧みと誘惑にそそのかされ、禁じられた実を食べたことで罪を犯しました（創3:13、Ⅱコリント11:3）。神は、ご自身の知恵と聖なる計画にしたがって、彼らの罪を許容なさることを良しとされました。神の目的は、それを通して、ご自身の栄光となるようにさせることでした（ロマ11:32）。

人間は創造された時、神の律法を知っていました。神の形に造られたから、道徳法が彼らの心に刻まれていました（4章2項参照）。禁じられた実を通して神の権威に対する人間の服従を試す目的を持っていて、神の恵みの中にいる者として、当然服従すべきでした。しかし、サタンの誘惑にアダムとエバは神の戒めを破ることで罪を犯すことになり、その罪は決して小さな罪ではなかったのです。神と神の権威とに逆らう反逆でした。

1項において、原罪を明確にした理由は、原罪に対する誤り等々があったためでした。ペラギウス主義、後期再洗礼派、ソツツイーニ主義、クエーカー主義者は、原罪の転嫁を否定し、イエズス会、ドミニコ会、フランシスコ会は、乙女マリアは原罪を持っていないと主張しました。クエーカー主義者は、幼い子供は原罪を持って生まれないと主張しました。アメリカ長老教会も19世紀後半から普遍主義を受け入れながら、1903年にウェストミンスター信仰告白書の10

章3項を改訂しますが、すべての乳児は死んだ時に救われると修正したことで原罪教理を否定しました。

I項において、神は人間の墮落を止めることもあり得たと暗示する言及をしています。しかし神には、必ずそうされるべき義務はありません。なぜなら、人間に能力と義をすでに付与なされたからです。それにもかかわらず、神は人間の墮落を許容なされたのですが、その知恵と聖なる計画によってでした。神は、すでに人間の墮落の可能性を知っておられ、それに対して神と御子は計画を持っておられ、御父と御子との間に約束があったのです。それを清教徒たちは贖い契約と呼びました。贖い契約は、御子が神の栄光を現し、神は御子の栄光を現すことなのです(ヨハネ17:4、5)。この贖い契約のゆえに、神は、アダムとエバが罪を犯した時、本来警告なされた通り、審判をなさる代わりに、恵み契約を与えます。

6.2. この罪によって、彼らは本来の義と神との交わりから墮落してしまい(創3:6-8、伝道書7:29、ロマ3:23)、罪の中で死んだ者となり(創2:17、エペソ2:1)、霊魂と肉体のすべての機能と部分において全的に汚れてしまいました(テトス1:15、創6:5、エレミヤ17:9、ロマ3:10-19)。

アダムが犯した罪の効果は、本来の義を失ってしまったこと、霊魂と肉体のすべての機能は、全的に汚染されてしまったことです。霊的理解力は暗くなり、意志は頑なになり、感情は汚く無秩序になりました。肉体も汚染され罪を犯す不義の道具となりました。それから人間は神との交わりは断たれ、罪の中で死んだ者となりました。カルヴァンは、キリスト教綱要の第二巻3-5章で、腐敗された人間の本性を扱いながら新生の必要性を述べました。清教徒たちも2項において、新生の必要性を暗示しています。

6.3. 彼らは、全人類の根源であったから、その罪責は、彼らのすべての子孫に転嫁され（創 1:27, 28, 2:16, 17、使徒 17:26、ロマ 5:12, 15-19、I コリント 15:21, 22, 45, 49）、罪による死と腐敗された本性が一般的な出生によって彼らから子孫に伝達されました（詩 51:5、創 5:3、ヨブ 14:4, 15:14）。

6.4. このような本来の腐敗によって、私たちは善を行おうとする心も一切持つこともできず、行える能力もなく、反抗し（ロマ 5: 6, 8:7, 7:18、コロサイ 1:21）、全的に悪を行おうとする性向だけがあるので（創 6:5, 8:21、ロマ 3:10-12）、あらゆる実際的な罪を犯すのです（ヤコブ 1:14, 15、エペソ 2:2, 3、マタイ 15:19）。

原罪はアダムとエバが人類の始祖として犯した罪なので、その罪責と罪による死と腐敗された本性が、自然的出生によって生まれて来るすべての子孫に転嫁されます。アダムが初めに犯した罪の責任が人類に転嫁されました。この人類の不変的墮落を意味します。従って4項において、善を行える意志もなく、能力もなく、悪を行おうとする性向だけがあるのだと叙述されています。

4項の叙述は、原罪の転嫁を否定する誤り等を念頭に置いています。アダムの罪が子孫に転嫁されないと主張するペラギウス主義と清教徒当時のローマカトリックと、アルミニウス主義とソツツィーニ主義です。アルミニウス主義者は、人間が善を行える能力を完全に喪失しなかったと主張します。18世紀のジョンナサン・エドワーズは、アルミニウス主義者が誤りであることを示しながら、罪を真似るだけではなく、悪を自ら犯す性向によって人間は悪を犯すと語りま

した。18世紀以降、アルミニウス主義者はウェスレアンを中心に福音的アルミニウス主義 (Evangelical Arminianism) へと発展し、19世紀のホーリネス運動と20世紀ペンテコステ運動に受け継がれ、20世紀以来は、現代福音主義者たちはアルミニウス主義神学を根本としています。マックレガー・ライト (McGregor Wright) は、自分の書である「*No place for Gods Sovereignty (神の主権失踪、1996)*」にて、現代福音主義神学では、神の主権がいるところが無くなってしまったと語りました。

6.5. このような本性の腐敗は、この世を生きる間には、新生した者にも残っています (Iヨハネ 1:8, 10、ロマ 7:14, 17, 18, 23、ヤコブ 3:2、箴 20:9、伝道書 7:20)。ましてや、腐敗性がキリストを通して赦しを受け抑制されていても、腐敗された本性とそこから出て来るすべての行動は、真に、そしてまさしく罪です (ロマ 7:5, 7, 8, 25、ガラテヤ 5:17)。

5項では、人間の罪を扱いながら、聖化の必要性を強調しました。つまり、新生した者にも、腐敗性が残っているから罪を抑制しなければならず、それは、人間の本性によって成るのではないから、聖霊の助けによってすべきです。清教徒たちは聖化を二つの部分に分けました。消極的な面は罪を抑制し殺すことと、積極的な面では聖霊に従って行うことです。ところが、道徳律廃棄論主義者は、清教徒たちのこのような観点を行い救済論として見て反対しました。道徳律廃棄論主義者は、聖化を救いの部分として含めようとせず、聖化を義認の証拠と認めることに反対しました。道徳律廃棄論主義者は、清教徒たちの聖化に対する強調と神学的理由を理解できませんでした。清教徒たちが聖化を強調したとしても、聖化を完全なものとして見たのではなく、不完全なものとして見ました。従って、清教徒たちが、行いによって救われるために聖化を強調し

たことは決してありません。

5項において現れている誤りは、ローマカトリックの教えです。教皇主義者たちは、改革神学では「本性の腐敗」と呼んでいる「不変的罪の性向」あるいは、「欲望」が原罪の一部ではなく、それ自体では何の罪にも該当されないと主張します。教皇主義者たちは、原罪が洗礼を通して除去されると信じ、腐敗した性向があるのは原罪の一部ではなく、アダムの中に初めから存在していた自然的本性だと話します。しかし、聖書では欲望を罪だと語っています。

6.6. 原罪であろうと、自犯罪であろうと、すべての罪はことごとく、神の正しい律法への違反であり、それに（正しい律法に）対して反することです（Ⅰヨハネ 3:4）。従って本性の中のすべての罪は、罪人に罪責を与え（ロマ 2:15, 3:9, 19）、その罪責のゆえに罪人は神の御怒り（エペソ 2:3）と、律法の呪いを受けるようになります（ガラテヤ 3:10）。結果的に罪人は霊的悲惨さ（エペソ 4:18）、一時的な悲惨さ（ロマ 8:20、哀歌 3:39）、そして永遠的悲惨（マタイ 25:41、Ⅱテサロニケ 1:9）を伴う死に屈服させられます（ロマ 6:23）。

6項では、神の律法に逆らうことを言及しながら、罪に対する概念を明確にしています。律法を犯すことが罪であり、罪人は律法に逆らったことに対して刑罰を受けます。清教徒たちが罪性と罪に対する結果を強調したのは、伝道的目的がありました。罪を悟ってこそ、キリストを信じなければならない理由と必要性を知るからです。それは、清教徒たちがルターから受け継いで、伝道の手段として律法の第一機能を強調したのでした。

6項は、今日の教会の中にある罪に対する誤りを表しています。ペラギウス主

義者とソツツイーニ主義者は、死が罪の刑罰ではないと主張します。彼らは、アダムが初めから有限な存在として創造されたから、その子孫も同じように有限だと主張します。そしてローマカトリック教会では、ある罪は死に至らせることもあり、ある罪は小さな罪だと教えます。しかし、罪がどんなに小さくても神の審判を呼び起こすだけでなく、死と罪の定めに至らせます。最も道徳律廃棄論主義者は、神の子たちにある、どのような罪も神は見ないと主張します。さらに進んで、信者は戒めを守る必要がないと主張します。しかし、神は信者にある罪を見られ、律法は信者に罪を悟らせます。従って、道徳律廃棄論主義者は深刻な誤りです。

清教徒時代以降に、罪と罪責に対する誤り等は、続けて起こされました。18世紀ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703-1758) が、アルミニウス主義者であったチャールズ・チャンシー (Charles Chauncy, 1705-1787) と論争する時、チャールズ・チャンシーは、エドワーズの罪と神の審判についての説教を批判しました。チャンシーは、神がそのように審判なさり、恐ろしい神であるなら自分は信じないとまで言いながら、エドワーズの神の審判についての説教は「神は愛です」という聖句と合わないと言いました。それに対してエドワーズは、チャールズ・チャンシーに神の慈悲だけを話し、公義を無視するのは間違っていて、神の慈悲だけを取るなら聖書の神ではなく、あなたの理性によって再構成させた神だと答えました。

チャールズ・チャンシーのような主張をする神学者は、今日は最も強力になっています。クラーク・ピノック (Clark Pinnock, 1937-2010) や、ハワード・マーシャル (Howard Marshall, 1934-2015) のような現代アルミニウス主義者は、神の審判を否定し、地獄教理を否定しました。⁸⁸ 20世紀から福音主義陣営でも使用している伝道小冊子等も、罪に対する概念をあいまいにさせています。人々の

利己的な性向を罪として言及しながら、罪に対する概念を主観的に変えてしまい、罪についてあいまいに述べています。最も、罪に対する神の審判を故意に欠けるようにさせ、福音の重要な内容を曲解させています。さらに福音主義では、罪の概念を心理的なものに変えてしまい、人間的な相談によって罪責を打ち消すように使役を行っています。